

早稲田大学大学院 創造理工学研究科

# 博士論文概要

## 論文題目

アドルフ・ロースの建築における「空間の運動性」

ヴァルター・ベンヤミンが見据えたロースの触覚的空間

A STUDY ON THE SPATIAL ATHLETICISM OF  
ARCHITECTURE BY ADOLF LOOS

The Tactile Space of Loos as Seen by Walter Benjamin

申請者

矢嶋 一裕  
Kazuhiro YAJIMA

2022年12月

本論文の目的は、19世紀から20世紀への世紀転換期にウィーンを中心に活躍したアドルフ・ロース（Adolf Loos, 1870-1933）の建築を、ヴァルター・ベンヤミン（Walter Benjamin, 1892-1940）による触覚概念に即して考察することで、ロースが達成した空間の質をあきらかにすることにある。本論文がベンヤミンのロース理解を通してロースを読み解くという二段階のアプローチ方法を採用することで目指すのは、ベンヤミンがロースを通して見据えていたロースの建築の可能性を探ることでロース建築の特質を再考することにある。

ベンヤミンは「カール・クラウス」（1931）と「経験と貧困」（1933）の二編のエッセイでロースに言及している。それらは僅かな言及に過ぎないが、ベンヤミンはロースをとおして時代変革期における知覚変容の議論につなげていると考えられ、ロースの存在はベンヤミンにとって思考を発展させる重要な存在であった。ベンヤミンを通じたロース理解という限定的な方法は体系的なロース像を描くことができない代わりに、ベンヤミンが見据えていたロースの歴史的意義を照らし出し、ロース建築の特質を考える上での一助となることが期待できると考える。ベンヤミンは「カール・クラウス」において、ロースの論考「装飾と犯罪」の主旨を「芸術作品と実用品の分離」と断定した上で肯定的に捉えている。続いて「経験と貧困」のなかで、「ちっぽけでもろい人間の身体」以外のすべてが変貌してしまった「新たな未開の状態」において、そのような状態を打破し新たな創造を生み出す「鋭敏な意識の持主」のひとりとしてロースを高く評価している。本論文が振り返ったのは、このようにベンヤミンが時代変革期における先達として評価した建築家ロースによる建築空間の質であった。

ロースに関する既往研究は、図面や写真といった研究史料の乏しさ、それとは対照的に残された論考の多さ、さらに竣工当時の状態をありのまま追体験できる建築の少なさの三つの困難に直面し規定されてきた。それにより協働者として設計にかかわり実際のロース建築を知るクルカの見解が追認されてきた状況や、実体験を伴わない観念的な研究が行われる状況が生みだされてきた。本論文は、このような既往研究を規定してきた状況を、実際の空間体験を巡って得られる感覚をもとに、残された史料や論考も含めて複合的かつ総合的に考察することで、ロース建築が達成した空間の質をあきらかにすることを目指している。

本論文の課題は、ベンヤミンによるロース評価を発端にロースの建築を「触覚」というキーワードに即して読み解くことで、ベンヤミンが時代変革期における先導者としてみていたロース建築の空間的質を解明することにある。そのための方法として本論文は「普遍的価値の不在状況とロースの価値基準の同定」、「ベンヤミンが見据えていたロースの可能性の把握」、「空間の運動性への着目」という三種の異なる位相の考察を試みた。

本論文は、序章、第一部3章、第二部2章、結語の構成をとる。

序章においては、本論文の研究背景と目的、ロース研究における本論文の位置、

方法を述べている。

第一部第一章では、19世紀末ウィーンにおける旧来の価値基準が有効に働かなくなってきた社会的文化的状況のなかで、拠るべき価値基準をどこに見出すか、という問いへの応答を探っていたロースの状況を確認した。ロースが建築家として活動を始めた時期のウィーンは社会的・文化的な普遍的価値が失われた状況にあり、ロースは自身の拠るべき価値基準を模索する状態にあった。のちに激しく非難することになるヨーゼフ・ホフマンとウィーン分離派を当初は肯定するなど、ロースは揺れ動きながら模索していたことがわかった。当時の状況をロースとホフマンの関係から浮き彫りにすると同時に、ホフマンが主要メンバーであったウィーン分離派とロースの関係を確認することでロースの立ち位置を同定した。

第一部第二章では、ベンヤミンが言及する論考「装飾と犯罪」へと続くことになるロースの初期論考を検討し、拠るべき価値基準の不在という世紀末ウィーンの状況下におけるロースが拠り所とした価値基準を探り、ベンヤミンが見据えた「装飾と犯罪」の意義と可能性をあきらかにした。ロースの拠るべき価値基準を探る手掛かりは「ゲヴェルベ (Gewerbe)」という術語にあった。ロースが考えるゲヴェルベとは、工業化される以前のデザインと製作の両方を担う職人が生み出すモノづくりであり、その手仕事による有用な日用品が想定されていた。そして、ロースが自らの拠るべき価値基準として提示したのは、「芸術作品と実用品の分離」であり、建築を実用品として「日常使用するもの」のひとつに位置づけたことである。ベンヤミンは、このような「装飾と犯罪」の主旨である「芸術作品と実用品の分離」を首肯し、ロースが提示した拠るべき価値基準がもつ意味をみつめ、その可能性を延伸していくことになる。

第一部第三章でみたのは、ベンヤミンが首肯したロースによる「芸術作品と実用品の分離」から導かれる「使用するもの」としての建築の受容方法である。ベンヤミンは「経験と貧困」の三年後の「複製技術時代の芸術作品」(1936)において、「鑑賞するもの」としての建築と「使用するもの」としての建築のふた通りの異なった受容方法を指摘し、それぞれ視覚と触覚に対応するとしていた。そして現代において、建築を「使用するもの」として触覚的に受容する必要性を説くのである。ベンヤミンは、「鑑賞するもの」としての建築受容を、精神を集中させてジッと「静観」する方法として提示したのに対し、それに対置される「使用するもの」としての建築受容は、日常的な「慣れ」による方法として提示していた。ベンヤミンの触覚概念の原初であるヒルデブランドによる触覚概念を確認することで、「慣れ」による触覚的な受容が何度も触れて確かめるという触覚的行為からの拡張であることが理解できる。そして、その「慣れ」による繰り返し行為によって形成されるのは、ある状況に対する典型的な反応である。ある状況に対応したある典型的反応は人間の習性となり、人間の習性は人間が共有する「空間的イメージ」を生み出すことになる。

第二部第四章では、人間の習性が形象化された空間的イメージとしての「空間の運動性」を整理し、ミュラー邸における「空間の運動性」をあきらかにした。「空間の運動性」は、人間の行動を喚起する建築的仕掛け（空間のあり方）と、その建築的仕掛けによってもたらされる空間的体験（空間の現れ方）の相互の結びつきによって構成されている。その「空間の運動性」を考察するにあたり、ヴァン・デューザーとクラインマンがミュラー邸において静的な主題と動的な主題を見出した研究を参照したが、彼らがみいだした静的な主題と動的な主題を「空間のあり方」と「空間の現れ方」に即して分析することで、あらためて「空間の運動性」を吟味した。それに加え、仕上材の素材そのものがもつ質感や色、模様をもたらす空間的イメージを新たな指標に加えることで、ヴァン・デューザーとクラインマンとは異なる「空間の運動性」を再構成することになった。

第二部第五章では5軒の住宅における「空間の運動性」を具体的に考察した。これらの考察対象は、「空間のあり方」と「空間の現れ方」を考察するための許可申請図面入手と実体験が可能であることを条件に選定された。選定された五軒の住宅における「空間の運動性」は、静的な空間の運動性を基本としながらも動的な空間の運動性が存在し、その両義性に空間的質の特徴をみいだすことができた。レーヴェンバッハ邸では隣室間の空間構成要素の反転に特徴が見られ、ドウシュニッツ邸では仕上材の模様や色による微細な「空間の運動性」に特徴がみられた。ミュラー邸において動線と左右対称軸のズレ（不一致）によって発生していた「空間の運動性」における静的状況と動的状況の調和は、ブリュンメル邸では動線と左右対称軸の一致により発生していた。ホーナー邸とローゼンフェルド邸では「空間のあり方」を考察するための図面作成する過程において、いくつかの図面史料を確認することで、管見によればこれまで明らかになってこなかった「空間のあり方」を発見することができた。

結語では、第一部と第二部の考察を要約することで本論文全体のまとめとした。本論文の特徴は「空間の運動性」を触覚性のあらわれとして分析したことにある。「空間の運動性」は人間の身体的運動を喚起する空間的イメージとして建築空間に形象化されており、その空間的イメージに誘発されて行動する運動体としての人間の身体は、動物的で野蛮な感覚である触覚を頼りにしていた。ベンヤミンがロースをとおして見据えていたのは、抛るべき価値基準が失われた「未開の状態」の世界において人間の居場所を構築するための根拠をどこに求めるかという問いに、動物的で野蛮な「人間の身体」を手掛かりとした触覚的感覚を根拠に導かれる建築空間の構築にあったと考えられる。抛るべき価値基準を喪失した時代と向き合ってなされたロースの建築的試みは人間の身体への確かさを頼りに、人間の動物的感覚へと還元される触覚によってとらえる建築空間の構築であった。ベンヤミンは、それまでの視覚と触覚の関係を転換させ、触覚の重要性を強調するが、そのベンヤミンの主張はロースの建築空間に形象化されていたのである。

## 早稲田大学 博士（建築学） 学位申請 研究業績書

氏名： 矢嶋 一裕

印

(2022年 11月 現在)

種類別	題名、 発表・発行掲載誌名、 発表・発行年月、 連名者（申請者含む）
学術論文	○1 「ブリュンメル邸における空間の運動性に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』第83巻、第750号、1571-1577頁、日本建築学会、2018年8月、矢嶋一裕、藤井由理、古谷誠章 ○2 「ミューラー邸における空間の運動性に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』第85巻、第772号、1325-1333頁、日本建築学会、2020年6月、矢嶋一裕、藤井由理、古谷誠章
口頭発表	1 「アドルフ・ロースのプルゼニ時代に着目する意義」『日本建築学会大会学術講演梗概集』9455頁、2017年7月、矢嶋一裕、斎藤信吾、藤井由理、古谷誠章
リサーチ担当	1 Ralf Bock, <i>Adolf Loos : Works and Projects</i> , Milano, 2021
著書	1 『「建築」という生き方』(共著)、陣内秀信監修、南風舎、2018年
雑誌記事	1 「直径10cmが映し出す世界」EU・ジャパンフェスト日本委員会報告書、2022年5月 2 「IN SEVERAL PLACES」EU・ジャパンフェスト日本委員会報告書、2018年5月 3 「地域の魅力を再認識させる建築家の力」新建築住宅特集9月号、2014年9月
作品 (代表的なもの)	1 傘庵 / Umbrella Tea House Naomi Pollock, <i>MADE IN JAPAN</i> , Merrell Publishers, London / New York, 2012, Kazuhiro Yajima <i>Architectural Review</i> , EMAP PUBLISHING LTD, London, 2012, Kazuhiro Yajima <i>DETAIL 10/2013</i> , München, 2013, Kazuhiro Yajima <i>best of DETAIL Materials + Finishes</i> , Institut für internationale Architektur-Dokumentation GmbH & Co. KG, München, 2016, Kazuhiro Yajima <i>Hinge Magazine</i> , Hinge Marketing Ltd., Hong Kong, 2013, Kazuhiro Yajima <i>Architectural Digest China</i> , AD安邸, Beijing, 2015, Kazuhiro Yajima 年鑑日本の空間デザイン—ディスプレイ・サイン・商環境、六曜社、2011年12月 商店建築、商店建築社、2011年3月 2 傘庵(クローバー型)、SD、鹿島出版社、2012年、矢嶋一裕 3 M house 百楽、ファンゲル出版社、2007年2月、矢嶋一裕 <i>HONGYUNTONG</i> , Boyuan Space International Press, ShenZhen, 2013, Kazuhiro Yajima 4 Windowscape 新建築住宅特集9月号、2014年9月 商店建築、商店建築社、2014年9月 5 EIGHT FACES、EU・ジャパンフェスト日本委員会報告書、2017年、矢嶋一裕 6 Mirroed Journey Derry Journal, Derry, Northern Ireland, 2022, Kazuhiro Yajima, Violeta Ivanova EU・ジャパンフェスト日本委員会報告書、2022年、矢嶋一裕、ヴィオレッタ・イヴァノヴァ